

第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議を振り返って

「第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議」実行委員長
人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系 高橋 実

第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議は、2006年10月17日の開会式に始まり、18日・19日の専門セミナー、そして20日の公開講演会という4日間の国際会議であった。参加者は、海外13か国30名を含めて78名であった。公開講演会にはセミナー参加者を含めて240名近い参加者があった。この国際会議はまずまずの成果をあげたといつてよいのではなかろうか。なによりもこの国際会議を、我が国のアーカイブズ・コミュニティが連携し協力しながら開催したことに大きな意義があったと考えている。

国際文書館評議会専門職教育研修部会（ICA/SEA）は、1988年にアーカイブズ学教育・研修の振興を目的に設置され、それ以来国際会議やシンポジウムを開催してきた。近年では世界各地域内での連携を強化し、教育・研修のより一層の発展に寄与するために地域国際会議を開催してきた。アジア地域では、2004年4月に中国人民大学档案学院（北京）で、第1回アジア太平洋地域アーカイブズ学教育国際会議が9か国約70名の参加のもとに開催された（会議の内容については、安藤正人「アジアのアーカイブズ学研究とアーキビスト教育 『アジア太平洋地域アーカイブズ学教育国際会議』に参加して」『アーカイブズ学研究』第2号）。

1. 北京での開催要請と実行委員会の設立

北京会議に日本からは5名が参加した。その際、第2回会議を2006年に日本で開催することを求められ、その要請を受けることを表明したのである。ICA/SEAでの正式決定を受けて、日本での受け皿として「第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議」実行委員会を2005年7月に立ち上げ、2006年11月に第13回目の実行委員会を開催し会議の最終取りまとめを行った。実行委員は14名で、実行委員会事務局は人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系が担当した。

会議の主催は、ICA/SEAと実行委員会で、共催団体は日本アーカイブズ学会、学習院大学、東京外国語大学21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、科学研究費補助金「歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究」で、また国立公文書館、人間文化研究機構国文学研究資料館、記録管理学会、企業史料協議会、駿河台大学、ARMA International 東京支部から後援をいただいた。

会議のねらいと概要

会議全体のテーマは「電子時代におけるアーカイブズ学研究とアーカイブズ学教育」とし、会議のねらいは「社会のIT化・情報化が引き起こしている世界共通の諸問題、たとえば膨大な現代記録を評価・選別するための理論と方法の問題、電子文書の真正性保証や管理・保存の問題、情報公開や個人情報保護制度の拡充にともなう記録公開システムの再構築問題などに、歴史的な背景を踏まえながら学問的立場から取り組むとともに、新しい情報資源専門職としてのアーキビストを育成するための方法について、各国のアーキビスト教育者・アーカイブズ学研究者と広く意見を交換し、世界に役立つ学術的成果をあげたい」というものであった（安藤正人「第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議」の開催について」『アーカイブズ学研究』第4号）。

国際会議の中心である専門セミナーと公開講演会の概要については、『記録管理学会 News Letter』No.27 及び近刊予定の『記録と史料』第16号を参照していただきたい。

専門セミナーは、3セッションに分かれ、各セッションは主報告と副報告で組み立てられている。報告は13か国から22報告で、各セッションのテーマは次の通りである。



専門セミナー

第1セッション；アーカイブズ学教育の過去・現在・未来

第2セッション；歴史アーカイブズと現代アーカイブズのための教育

第3セッション；脱保管（ポスト・カストディアル）のアーカイブズ学教育

公開講演会は、「記録の未来 電子時代におけるアーカイブズ学を考える」を共通テーマとし、アーカイブズ学研究の第一線で活躍している三人に、アーカイブズ学研究・アーキビスト教育の現在を講演していただいた。専門セミナーの海外参加者もほとんど出席していたのが印象的であった。

2. 専門セミナーと公開講演会で考えたこと

専門セミナーのいずれの報告も私にとって知的刺激と示唆に富むものであった。セミナーで私たちが目標とした「各国のアーキビスト教育者・アーカイブズ学研究者と広く意見を交換し、世界に役立つ学術的成果を上げたい」という点でも大きな成果を上げたと思う。

ハンス・シュクコークル ICA/SAE 委員長がメッセージで述べているように、アーカイブズの充実はアーキビストに高い専門教育を提供することで実現するものであり、アーキビストは自ら積極的に学問的実務的な課題解決に取り組みなくてはならない、ということをもさに確信することができた。

各報告を聞いて、各国のアーカイブズ学及びアーカイブズ教育にはそれぞれの歩みがあり、異なる事情はあるが、しかし各報告に共通していることは高いレベルのアーカイブズ学研究とそれに基づく教育によって質的に高いアーキビストを育成し、それによってアーカイブズ・システムの拡充をはかり、利用者の高度利用につなげたいと考えていることである。

アーカイブズ学は、実学的性格が強い分野で、研究が実務によって検証され、また実務から研究に問題が投げかけられるという研究と実務が相互に有機的につながっているのが特質であるが、しかしアーカイブズ学が基軸であるということは確認できた。

アーカイブズ学は、歴史学や図書館学から離脱して独立した若い学問分野であり、そしていくつかの変革を経て、さらに今日かつてない大きな激動の中にある。大激動とは、高度情報化社会の急速な進展であり、従来アーカイブズ学では対応しきれないものである。このような状況の中で、21世紀のアーキビストはどう自己変革するかが問われている。若い分野だけに活力はある。その点で、まずアクテブに行動を起こすべきだという発言は印象に残った。

三つのセッションは、それぞれ歴史的アプローチ、高度情報化社会という新しい環境下でのアーカイブズ学教育の転換の問題、そして脱保管という21世紀のパラダイム・シフトのもとでのアーカイブズ学研究・教育の問題が提起され論議された。いずれの報告者もアーカイブズ学研究・教育への取り組み姿勢は、能動的であり、問題意

識の高さと課題解決への情熱を感じる事ができた。

このセミナーで確認できた点は、21世紀初頭における世界の諸問題を共有しえたこと、問題解決の方向が確認されたこと、そして高度情報化社会ではより一層アーカイブズの存在意義が増していくこと、アーキビストは情報資源専門職へと変化しつつあること、そのためには長期的戦略的計画のもとに新しいステージに登る必要があること、これら点が確認されたのである。さらに共通に了解されたのは、アーカイブズ学教育の諸問題を考える基礎として、アーカイブズ学研究の問題を考えるべきであり、アーカイブズ学と隣接する諸学問分野との学際的連携に留意する必要があるということである。

また公開講演会は、我が国のアーキビスト・システムの立ち遅れを解消するための知恵を示し、道筋を示していただいたものである。かつまた、高度情報化社会でのアーカイブズ及びアーキビストの役割の大きな転換についての指摘も示唆に富むものであった。文字通り「協力と発展」の必要性を実感することができた。

3. おわりに

我が国のアーカイブズは遅れて出発した。いまでも決して進んでいるとはいえない。1986年、ICA国際標準化担当委員のマイケル・ローパー氏が来日され、日本のアーカイブズ発展のため12項目の課題を提起した。それから20年を経過したが、我が国は今なお「アーカイブズ・ルネッサンス」前の段階にあり、解決しなければならない問題が少なくない。なかでもアーカイブズの中核を担うアーキビストの養成制度の確立とアーカイブズ学研究の振興は重要な課題である。そういう点で、「電子時代におけるアーカイブズ学研究とアーカイブズ学教育」をテーマとする今回の国際会議は、まさに時宜をえたものとなったのではなかろうか。

この会議が、我が国のアーカイブズ制度、アーカイブズ学教育にとって歴史に残るものになるかどうかは、今後の私たちの努力如何にかかっている。この会議がきっかけとなって、わが国がアーカイブズの拡充という途を歩むことができ、それが世界のアーカイブズの発展に寄与することを望みたい。

今回の「第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議」の成功は、2年前から準備を進めてきた実行委員各位の努力はもとより、国内外の多くの関係機関・団体ならびに関係者の方々の絶大なるご支援、ご協力のたまものである。心より感謝申し上げます。

この文章をまとめているとき、ハンス・シュクコーグル ICA/SAE 委員長の訃報を聞いた。心から哀悼の意を表したい。